

# 普及指導員調査研究報告書

所属名：下関農林事務所農業部

担当者：廣林 祐一

課題名	イチゴ産地の再構築（新品種‘かおり野’の現地特性把握）
-----	-----------------------------

## 1 調査研究チームの構成

農林事務所：岡藤由美子、三井義則、高林正典、廣林祐一

JA 下関：原田（豊北）、的場（本所）、河田（豊田）、中野（清末・王司）

## 2 課題の目的

下関管内では、イチゴ単価の低迷、燃油や資材費の高騰などにより、イチゴの収益性が低下している。そこで、JA 下関ではイチゴの収益性を改善するために、新たに省エネ品種（‘かおり野’）の導入を検討している。

そこで、品種の導入に向けて、管内の沿岸部と山間部の2か所に現地実証ほを設け、品種特性の把握と栽培技術確立に必要な基礎データを収集し、今後の現地栽培技術確立に資する。

## 3 調査研究期間

平成 24 年 9 月～平成 25 年 3 月

## 4 調査研究の対象地域・場所

下関市（清末地区・豊田地区）

## 5 調査研究方法の概要

- ・栽培様式：三笠方式（温度設定は最低 6℃以上を確保）
- ・調査時期：平成 24 年 9 月から毎月 1 回程度
- ・調査項目：草高、出葉第 3 葉の葉長、生育ステージ、収量、糖度  
(収量は実証農家の‘とよのか’と比較)

## 6 結果の概要、成果

- ・‘かおりの’導入に向け、品種特性の把握と栽培技術確立に必要な基礎データが収集できた。（高設の三笠方式では、問題なく栽培できることも確認）

### (1) 清末ほ場

- ・草勢は、11～12 月はやや強めに推移したが、着果負担により徐々に低下した。
- ・花芽は（安定的に）連続して分化し、11 月下旬から収穫が始まり 2 月までの収量は‘とよのか’と比較すると倍以上の約 3 t/10a 確保できた。また、3 月現在で、第二次腋花房の収穫が開始され、第三次腋花房も開花しており、今後も中休みすることなく収穫ができる見込みである。
- ・糖度は草勢の低下に伴って低下する傾向にあり、果実によるバラつきも大きくなった。

(2) 豊田ほ場

- ・草勢は、定植直後の低温管理によりやや低めに推移したが、年明け後は極端に低下することなく維持できている。
- ・花芽は(安定的に)連続して分化し、12月上旬から収穫が始まり2月までの収量は‘とよのか’と比較すると1.5倍程度の約2t/10a確保できた。清末と比較するとやや生育ステージは遅れているが、3月現在で、第二次腋花房の収穫が一部で開始され、第三次腋花房も出蕾しており、今後も中休みすることなく収穫ができる見込みである。

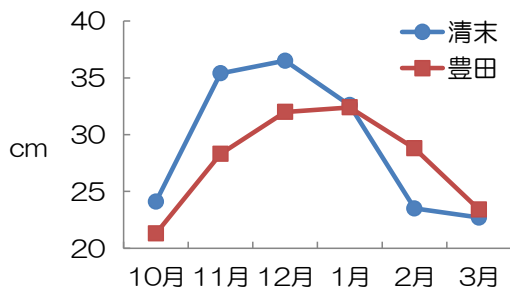


図1 ‘かおり野’ 草高の推移

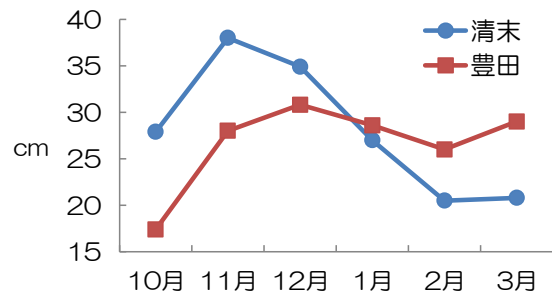


図2 ‘かおり野’ 葉長の推移

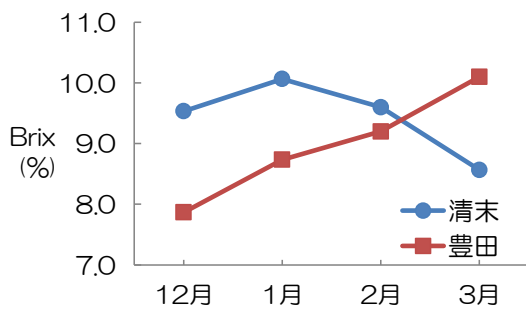


図3 ‘かおり野’ 糖度の推移

表1 ‘かおり野’ 生育ステージ

生育ステージ	清末	豊田
頂花房開花始め	10月中旬	10月下旬
頂花房収穫始め	11月中旬	12月上旬
第一次腋花房開花始め	11月中旬	11月下旬
第一次腋花房収穫始め	1月中旬	1月上旬
第二次腋花房開花始め	1月上旬	1月下旬
第二次腋花房収穫始め	3月中旬	3月下旬
第三次腋花房開花始め	3月上旬	—
第三次腋花房収穫始め	—	—

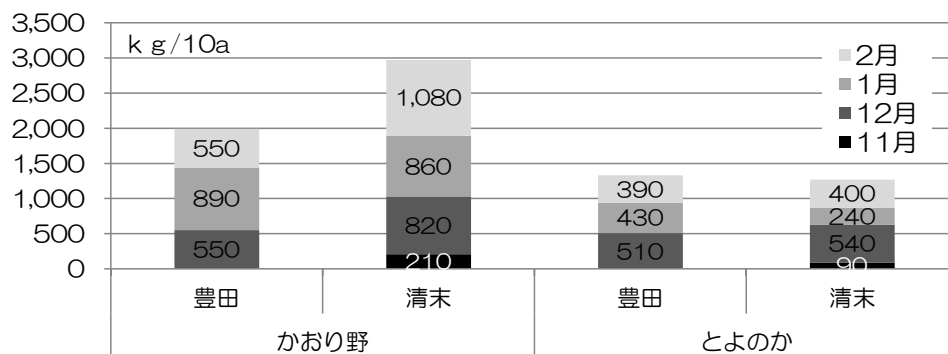


図4 2月までの収量比較

7 今後の問題点

- ・平成25年度より、栽培者が大幅に増加する見込みであるが、下関管内は多様な栽培方式が混在しているため、栽培方法毎に細やかな栽培管理指導が必要となる。
- ・着色と食味のバラツキの改善。

8 普及活動上の留意点

- ・これまでの品種(‘とよのか’)とは特性が大きく異なるため、生産者に対し、栽培管理のポイントを入念に周知させる必要がある。